

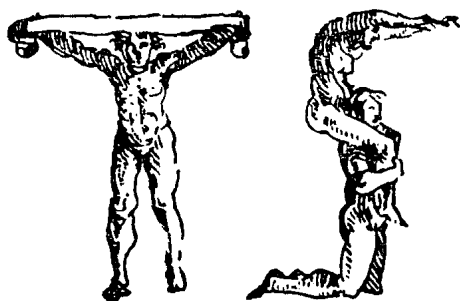


ジブリオテカ
澁澤龍彦

II

ビブリオテカ
澁澤龍彦

II



白水社

ビブリオテカ澁澤龍彦Ⅱ(全6巻)
悪魔のいる文学史 旅のモザイク

定価二五〇〇円

一九七九年一〇月三〇日印刷
一九七九年一月一日発行

著者 © 澁澤龍彦

発行者 中森季雄

印刷者 青木勇

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(二九)七八一一
編集部〇三(二九)七八二一
振替 東京 九一三三二二八
郵便番号 一〇一

精興社印刷・黒岩製本

(分) 1390 (製) 76860 (出) 6911



ジブリオテカ
澁澤龍彦

II

ビブリオテクニカ澁澤龍彦Ⅱ(全6巻)
悪魔のいる文学史 旅のモザイク

定価二五〇〇円

一九七九年一〇月三〇日印刷
一九七九年一月一五日発行

著者 © 澁澤龍彦

発行者 中森季雄

印刷者 青木勇

発行所 株式会社白水社

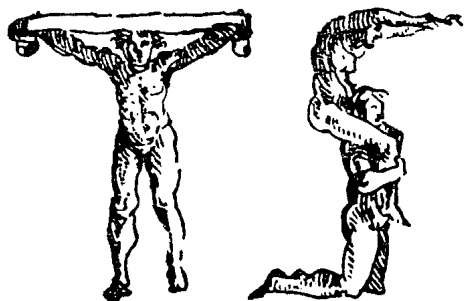
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(二九)七八一
編集部〇三(二九)七八二
振替 東京九一三三二二八
郵便番号一〇一

精興社印刷・黒岩製本

(分) 1390 (製) 76860 (出) 6911

ビブリオテカ
澁澤龍彦

II



白水社

目次

悪魔のいる文学史

エリファス・レヴィ	神秘思想と社会変革	九
グザヴィエ・フォルヌレ	黒いユーモア	三四
ペトリュス・ボレル	叛逆の狂詩人	六二
ピエール・フランソワ・ラスネール	殺人と文学	八二
小ロマン派群像	挫折した詩人たち	一〇二
エルヴェ・ド・サン・ドニ侯爵	夢の実験家	一三六
シャルル・クロス	詩と発明	一五四
ジョゼファン・ペラダンとスタニスラス・ド・ガイタ侯爵		
モンフォコン・ド・ヴィラール	精霊と人間の交渉について	二三〇
シニストラリ・ダメノ	男性および女性の夢魔について	二五二
サド侯爵	その生涯の最後の恋	二六三
	世紀末の薔薇十字団運動	二八九

ザッヘル・マゾッホ	あるエピソード	二七六
アンドレ・ブルトン	シュルレアリスムと錬金術の伝統	二九三
あとがき		三二

旅のモザイク

ペトラとフローラ	南イタリヤ紀行	三五
千夜一夜物語紀行	中近東への旅	三四三
日本列島南から北へ	珊瑚礁 火の山 風と光と影 流水	三六九
あとがき		四三二
あとがき		四三三
初出一覧		四三五

装幀 著者

悪魔のいる文学史

目に見える言語で形づくられた

この世は神の夢だ。

神の言葉は、この世のもろもろの象徴をえらび、

聖霊は、この世を神の火で満たしたのだ。

愛の、栄光の、はたまた恐怖の

この生きた書物を

イエスが我らのためにふたたび見出し給うた。

それというのも、あらゆる秘密の学問は

エホバの聖なる名前から

発した文字にはかならないからだ。

自然の法則を解し得る者にとって、

自然の一切は決して沈黙してはいない。

星々には文字があり、

野の花々には声がある。

闇夜に輝やく言葉、

数のように厳正な語句、

すべての音が一つの反響^{こだま}でしかない声、

かつて祭司たちの叫び声が

エリコの城壁を震動させたように

ありとあらゆるものを動かす声。

右に翻訳して引用したのは、エリファス・レヴィの「コレスボンダンス」と題された詩の一部（十行詩十節のうちの第四節と第八節）である。すでにジャック・クレベとジョルジュ・ブランの詳細な『悪の華』の批評版にも指摘されているように、このレヴィの詩は、のちに象徴主義の理論の基礎となった、あの名高いボードレールのソネット「万物照応^{コレスボンダンス}」に直接の影響をあたえた、いわば先駆的な作品ということになっている。

フランスのロマンティズムは、ようやく最近にいたって、いくつかの重大な修正を受けつつあるようである。ハイネの嘲笑的な言葉がそれを示しているように、長いあいだ、フランス十九世紀初頭のロマン主義の運動は、ドイツ・ロマン主義の皮相な猿真似と解せられ、古典主義的クラルテを重んずるフ

ランス文学の伝統的な体質には、曖昧な神秘や幻想の入りこむ余地はないと信じられてきたのであった。この通念をひっくり返したのがオーギュスト・ヴィアット、アルベール・ベガン、レオン・セリエ、ビエール・カステックス、あるいはドイツのエルンスト・ロベルト・クルティウスなどの批評家であって、彼らの見解によると、一般的にはレアリストと見られていたバルザックは幻視家、センチメンタルなラマルティエヌは調和の詩人、貴族主義者ヴィニーは新プラトン派的な哲学者、そして豪傑趣味のゴッティエは不安の精神の体現者ということにもなるのである。またネルヴァルの評価が急激に高まるにつれて、彼とともに生き、彼とともに挫折した、いわゆる「小ロマン派」に属する群小文学者にも照明があてられるようになってきたことも、ここで忘れずに述べておかねばならぬであろう。

「小ロマン派」とは何か。それは叛逆と挫折の世代である。一八三〇年「エルナニ」事件と七月革命の年）の世代と呼ばれる彼らは、大革命後の社会の反動化を身をもって経験した、いわば不安と絶望の世代であって、彼らのメランコリーや想像力は、政治的理想の挫折によって惹き起された幻滅やら、宗教的信仰の危機から生じた虚無感やら、ブルジョワの金銭万能主義に対する嫌悪やらのうちに、いよいよ鋭く研ぎすまされたのである。むしろ、大部分の作家たち、ユゴー、サント・ブーヴ、ヴィニー、デュマ、バルザックらは、やがて体制に順応し、制作によって絶望感を克服し、時代の悪徳を冷静に見つめながら、芸術家としての自己を完成させる道をえらぶことになるのであるが、ここでとくに注目しなければならないのは、これらの正統ロマン派たち、あるいは大ロマン派たちの周辺に、自由なボヘミアン生活を送りながら、もっとも極端な「芸術のための芸術」を叫び、政治的にはかなり急進的な立場をとりつつ、しかもブルジョワ進歩主義者の俗物主義を嫌悪排撃し、あらゆる既成の權威に「否！」を

たたきつけた、いわばロマン派の傍系ともいうべき、スキャンダルを好む少数の過激な青年たちの一群がいたということである。これが「小ロマン派」だ。

要するに彼らは、世紀末の「呪われた詩人」や二十世紀のシュルレアリストの遠い先輩格にあたっていたわけで、価値の転倒した大革命後の社会と人間の矛盾にもっとも深く魂を傷つけられた、喪失の世代の代表だったわけである。深刻なベシミズムと、ブルジョワの俗物主義にむすびついた楽天的な進歩の思想に対する、抜きがたい侮蔑とから、彼らはことさら現実から目をそむけ、陰惨な恐怖にみちた反社会的な幻想や、古代の輝かしいデカダンスの夢や、さては人間の力のおよばぬ神秘や驚異の超絶的な世界に、みずからの想像力を解き放ち、酔い痴れたのであって、その異様な美にみちた毒花のごとき幻想の根柢には、必ずしも現実逃避という単純な言葉だけでは片づけられない、複雑な心理の屈折があったことを忘れてはなるまい。彼ら過激派のほとんど大部分は、この現実嫌悪の必然的ななりゆきから、第二帝政成立の前後に、狂気したり自殺したり、あるいは文学的落伍者となったりして、失意と不遇のうちに姿を消してしまうのであるが、これも純粋なロマンティシズムにつきまとう必然の悲劇であり、宿命であったといえるかもしれない。

ロマン主義の運動とは、もともと論理に対して非合理的なものを、知性に対して無意識的なものを、歴史に対して神話もしくは伝説を、日常的現実に対して夢を、昼に対して夜を、それぞれ称揚する精神の運動にほかならなかったが、彼ら少数の過激派によって、この傾向はさらに幻想的、怪奇的、反社会的、無政府主義的、ユートピア的、神秘主義的、秘教的な方向にまで助長されたのである。この「小ロマン派」のなかに、シャルル・ノディエ、ジェラルド・ネルヴァル、テオフィル・ゴティエをは

じめとして、ペトリュス・ボレル、グザヴィエ・フォルヌレ、フィロテ・オネディ、アルフォンス・ラップ、シャルル・ラッサイ、ピエール・シモン・バランシュ、フィラレート・シャルル、アルフォンス・エスキロス、ジュール・ルフエーヴル・ドゥーミエ、ロジェ・ド・ボーヴォワール、ジャン・ポロニウス、アルフォンス・ロワイエなどの、一般にはあまり名前の知られていない、しかしながら一癖も二癖もある奇矯な文学者のめんめんがあり、私はこの論稿のなかで、今後何回かにわたって、彼らのなかの幾人かを紹介してゆくつもりなのである。そして最初に私が「コレスボンダンス」の詩を引用したエリファス・レヴィも、一時期、たしかにこのグループの周辺に属していた風変りな人物なのであった。

エリファス・レヴィは従来、その生涯の後半期に書いた『高等魔術の教理および儀式』二巻によって、ユゴー、ボードレール、ランボー、リラダン、マラルメ、イエイツ、ジャリなどの象徴派詩人から、さらにジョイス、ヘンリー・ミラー、アンドレ・ブルトンなどの現代作家にまで絶大な影響をあたえた、十九世紀最大の隠秘学者^{オカルティスト}として知られていた人物であるが、最近のボードレール学者たちの研究では、その独特なコレスボンダンスの理論によって『悪の華』の詩人に詩的靈感の源泉を提供した、小ロマン派中の異彩としても見直されるようになってきている。

ボードレールが『悪の華』の有名なソネットを書くにあたって、その主題や内容を多くの先人たち、たとえばフリーエ、スウェーデンボルグ、ネルヴァル、ラヴァーテル、サン・マルタン、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌたちから借用したらしいということは、現在では半ば文学史の常識となっている。むしろ、それによってボードレールの作品の価値が減ずるということとはあり得ないだろう。ところで、

一九三五年にジャック・クレベが偶然に発見したという、一八四四年当時ボードレールが寄稿していた無署名共同執筆のゴシップ専門小冊子『パリ劇壇艶話』には、ボードレール自身の筆によると思われる、暗にエリファス・レヴィを諷した噂話や皮肉な戯文が多く載っていて、ボードレールがそのころ、すでにレヴィを知っていたにちがいないことが証明されているのだ。のみならず、同じ題名の「コレス・ボンダンス」以外にも、『悪の華』のなかの数篇（たとえば「あまりにも陽気な女に」「午後の唄」「高翔」など）に、明らかにレヴィの詩と同じ調子のもを見出すことができる。とクレベは指摘している。どうやら詩人はレヴィの着想をすっかり頂戴していたらしいのだ。

のちにボードレールが『高等魔術の教理および儀式』（一八五六年）を読んでいたのは確実で、たとえば一八五九年のブルー・マラシ宛ての手紙には、「あなたの二つの拳固に磁気流体を満たし、それで交互に力いっぱい背中と太陽叢をたたきなさい。それは呪いの一種と見なされるはずです。『高等魔術の儀式』によれば、強い意志をもってする呪いはきっと成功するのです」とある。ボードレールが晩年、いかに魔術や隠秘学に凝っていたかについては、ジョルジュ・ブランの興味ぶかい研究（『ボードレールのサディズム』一九四八年）がある。

前にも述べたが、ロマン派や象徴派の詩人たちがいずれもレヴィの影響を受けていたのは驚くべきほどで、たとえばオーギュスト・ヴィアットによれば、ユゴーの『サタンの終り』（一八八六年）には明らかにレヴィの『自由の誓約』（一八四八年）の反映が認められるという（『ヴィクトル・ユゴーとその時代の幻想家たち』一九四三年）。またヴィリエ・ド・リラダンは一八六六年九月十一日付の手紙で、マラルメに『高等魔術の教理および儀式』を読むことをすすめている。そのためか、マラルメは隠秘学によって